

「孟蘭盆会」

平成二十九年八月二十五日
五泉市永谷寺副 吉原東玄

孟蘭盆の語源に諸説あり

○ 漢語で「倒懸(とうけん)」と訳される「ウランバナ」。

倒懸とは地獄で死者が逆さまに吊るされる苦しみを表す。

○ 近年有力説はイラン系ソグド人の言葉で死者の靈魂を意味する「ウルヴァン」。

ウルヴァンという収穫祭(農耕儀礼)と死者の靈を祀る行事が中国の農耕儀礼(中元)へ伝わり、仏教習俗と結びつき孟蘭盆会へと成立。

○ 「水陸会」(孟蘭盆会を別名「すいりくえ」とも言う)

七月十五日は中国の「中元」で、俗に言う「鬼節」、死者がこの世に戻ってくる時節にあたり、「孟蘭盆会」は中国的変容をげたものであろうと見られる。

これらの悪鬼を水上や陸上から供物を投げてなだめ、水辺より発する疫病、災害を取り除こうとした。

水の横死者を多く出す文化の中心地、中国・江南地方に起こりましたが、水の少ない地方でも、供養の場所を水辺に選ぶことになっていった。

民俗学者、柳田国男は「先祖の話」の中で、「盆」は本来「梵」であり、神靈に供物を盛る器物で、古くは「ボニ」と呼んでいたものが、「盆」になったという説を述べている。

また、神靈に食べ物を供えることを「ホカヒ」と言い、また、梵は「へ」、「ヒラカ」、「ホトキ」、「サラケ」とも言い、死者を無差別に「ホトケ」と言うようになったのは、本来「ホトキ」という器物に供え物を入れて祀る靈、ということ、中世民間の盆行事から始まったものと推定した。